生まれ変わりをどのように考えるか

坂井　祐円
仁愛大学人間学部

What do you think about Reincarnation?

Yuen SAKAI
Department of Human Studies, Jin-Ai University

20 世紀後半の死生学研究の展開の中で，生まれ変わり現象についての科学的アプローチによる研究が進んだ．この研究には大きく二つの方向がある．一つは世界各地の前世記憶をもつ子どもの事例についての調査研究であり，もう一つは退行催眠を用いたトラウマ治療の中で，生まれる以前の過去生の記憶を語り出すという事例についての心理研究である．とりわけ後者の研究では，被験者が一つの人生から別の人生に移行する間にあるとする中間生（あの世）についての記憶や，魂の成長のために生まれ変わるという目的を語ったことを報告している．本稿では，まず前半でこうした生まれ変わり現象の科学的な研究の成果を紹介する．そして，これを踏まえた後半では，生まれ変わり現象についての授業を受けた大学生のレポートを取り上げ，そこに見られる意見や感想をもとに，生まれ変わりをどのように考えたらよいのかについて，死生観や伝統宗教との関連から考察する．
キーワード：生まれ変わり，前世記憶をもつ子ども，退行催眠，魂の成長，死生観

１．はじめに

近代以前では，人間は肉体と霊魂の二つの次元からなり，亡くなった後にも何らかの世界が続いているとする他界観念をもつ文化が圧倒的に多かった．他界観念は宗教が発生する源泉の一つでもあり，その意味ではかつての人々はみな宗教的世界観のもとで生きていたのである．ところが，18 世紀後半からヨーロッパで確立しつつあった科学主義的な世界観，いわゆる唯物論的思考のグローバリゼーションに伴って，「意識は脳の副次作用であり，肉体（および脳）が機能停止すれば意識も消失する」という考え方が主流を占めていき，肉体に依拠せずに存続する意識，すなわち精神的実体としての霊魂の存在は否定されることになる．そのため, 他界観念は空想上のメタファーと見なされ，科学的な研究対象からは除外されるようになった．それは宗教学や民俗学などの対象にはなり得るとしても，科学的知識とは相容れない，文化や習俗によって形成される観念体系という位置づけとなったのである（坂井，2018）．

しかしながら，20 世紀の後半に死生学研究の流れの中で展開した「臨死体験（Near Death Experience)」に関する調査報告の成果は,「脳が機能停止していたにもかかわらず，明瞭な意識状態を保ったまま自分の肉体を眺めていたり周囲を観察したりしていた」（体外離脱体験），あるいは「死後の世界を彷彿とさせるヴィジョンと遭遇し，その世界を明瞭な意識状態のもとで体感していた」などの証言をもとに，意識は脳の副次作用であるとする唯物論的学説への疑問を提示するこ

ととなった．そして，同じく20世紀後半に，全く別のアプローチから「意識は肉体が滅びた後にも存続する」という仮説を支持する有力な研究成果が発表されることになる．それが「生まれ変わり（reincarnation）」と総称される現象に対する調査報告である．

生まれ変わりは，民話や伝承のような民俗文化を含めると，世界各地で見られる現象である．思想史的に見れば，その起源はかなり古く紀元前1200年くらいまで遡ることができ，インドのヴェーダ聖典，ウパニシャッド哲学に始まり，ヒンドゥー教，仏教に至る輪廻転生の思想の系譜が顕著である．また，古代ギリシャの宗教思想であるオルフェウス教やピタゴラス教団，そしてプラトン哲学，ネオプラトニズムにおいて転生の思想が見られる．さらに，輪廻転生の教義をもたない一神教の系譜であっても，キリスト教の異端とされるグノーシス主義，カタリ派や薔薇十字団において生まれ変わりが唱えられていたし，イスラム教のアラウィー派やドゥールズ派でも生まれ変わりの考え方が取り入れられている（McClelland, 2010・宗教学事典, 2010）．

ところで，現代人の感覚からすると，生まれ変わりをこのような歴史的な宗教信仰の一形態と理解するのであれば，文化の多様性の問題として無難に受け入れることもできるわけであるが，けれども，「生まれ変わりは，客観的事実として実際に起こっているのであり，科学的にも実証可能な現象である」などと言われると，少々身構えてしまうのではないだろうか．ましてや「生まれ変わりは人類の普遍的な原理であり，すべての人間は魂を成長させるために何度も生まれ変わりをくり返している，それはあなたも例外ではないのだ」と，断定的に結論づけられてしまうとすれば，途端に懐疑的になり心理的な抵抗が生じるのではないかと思う．科学主義的な教育を受け，その思考に馴染んできた者からすれば当然のリアクションであり，中には既成の科学理論との整合性が図れないことから，全くのナンセンスだと取り合わなくなる者だっているかもしれない．

筆者は，これまでの研究遍歴の中で仏教学を専攻していたこともあり，仏教の説く業報因果にもとづく輪廻転生の思想については馴染みがあったが，あくまで思想的な問題として理解してきた．言わば，一つの神話として扱い，そこに潜む深層心理を解釈するという範疇を出なかったのである．ところが，生まれ変わりの科学的なアプローチによる研究が実際に行われていることを知り，これが事実であるとすればどのように考えたらよいのか困惑が生じた．そのため，ここ数年は，大学の授業などでこの問題を取り上げ，学生たちがどのような反応を見せるのかを探ろうと，一緒に話し合ったり感想や意見などをレポートに書いてもらったりしている．これは若者の死生観について考える上でも，それから筆者自身の考察の視野を広げる上でも大変参考になっている．

そこで本稿では，前半でまず，生まれ変わり現象についての科学的なアプローチによる研究を，その評価なども含めて概観し，これを踏まえて後半では，学生たちのレポートの内容を取り上げ，これらをもとに生まれ変わりの現象をどのように理解していけばよいのかを考えてみたいと思う．

2. 生まれ変わり現象への科学的アプローチ

2-1. 生まれ変わり研究の概要

生まれ変わり現象に対する科学的なアプローチは，大きく分けて二つある．一つは，自分には前世の記憶がある，別の人物の生まれ変わりだと自発的に語り出した子どもやその家族に直接インタビュー調査を行い，その話に食い違いがないか，記憶の歪みがないかなどを検証し，複数のケースの共通特徴などを記述していく．また実際に前世とされる話の中に登場する人物や場所などを実地調査して，整合性があるのかを検証する，といったアプローチである．これはアメリカのヴァージニア大学医学部精神科教授のイアン・スティーヴンソンを中心とする研究グループによって始められたもので，スティーヴンソン博士の引退後は，同じ研究グループのジム・タッカーに引き継がれ，50年以上に渡って継続的に行われている．

もう一つは，「退行催眠」を用いて，過去の記憶をたどり，生まれる以前の記憶を思い出させ，語られた内容を記述していく．そして語られた内容を心理分析し，作話や虚偽，妄想の可能性がないかを検証する，といったアプローチである．これは，もともとは催眠

を用いて幼少期の恐怖体験を再現することで原因不明の恐怖症などを治癒していく，というトラウマ治療の過程において偶然に発見されたもので，アメリカのマイアミ大学医学部の精神科医ブライアン・ワイスや，カナダのトロント大学医学部精神科教授の J.L. ホイットンなどが，語られた前世記憶の内容分析について発表している．こうしたアプローチは，現在では催眠療法（hypnotherapy）の一種として位置づけられ,「前世療法（past-life therapy）」とも呼ばれている．

日本では，学術的なレベルでの研究はほとんど進んでいないが，その中にあって，中部大学教授の大門正幸による日本人の生まれ変わり現象に関する調査研究は注目される．大門は，ヴァージニア大学医学部の知覚研究室の客員教授としての経歴をもち，方法論的にはスティーヴンソンやジム・タッカーらの研究を引き継いでいる（大門，2015）．基本はインタビュー調査を通してその内容を検証するという方法を取っているが，一方で，退行催眠を用いて前世の記憶を思い出させた結果,「真性異言」（後述）を語り出したというケースにも立ち会っており，これを研究成果として発表している（大門，2011）．他には，産婦人科医の池川明による調査報告を挙げることができる．これは，池川が幼児のもつ胎内記憶について保護者を対象にしたアンケート調査やインタビュー調査を行った際に，その過程で前世の記憶や「中間生記憶」（後述）をもつ子どもがいることがわかり，結果的に生まれ変わり研究になったという例である（池川，2007）．

2-2. 前世の記憶を持っている子どもたち

ここからは生まれ変わり研究の具体的な展開とその成果について見ていくことにしよう．

まずはヴァージニア大学のイアン・スティーヴンソン博士を中心とする研究グループの調査報告の成果である．スティーヴンソン博士は，30 代の後半で精神科主任教授になるほど，精神医学研究において華々しい業績を上げていた傍らで，超常現象に対する強い関心をもっていた．1958 年にアメリカ心霊研究協会が公募する懸賞論文に，古典や書籍，雑誌，新聞などに記されていた世界中に広がる生まれ変わりに関する事例のうち，信憑性の高いものを 44 例集めて報告したものを応募したところ，当選し公刊されることとなった（Tucker,2005）．ヴァージニア大学の生まれ変わり研究は，この論文がきっかけとなって始まったのである．ちなみに，この 44 例の中には，日本の江戸後期に国学者の平田篤胤が記した『勝五郎再生記聞』(平田，2000）が含まれている．

その後スティーヴンソンは，1961 年にインドとスリランカに赴いて，前世の記憶を語る子どもとその家族や近親者に直接会ってインタビュー調査を進め，その語られた前世とおぼしき人物の住んでいたと思われる場所や家族などを特定して現地に赴き，その人物の生涯と子どもの発言内容とがどれほど一致するのかを丹念に調べ上げていくことで，客観的な水準を保持していると考えられる 20 の事例を厳選してリストを作成し，1966 年にこのテーマによる最初の著書を出版した．この著書に対して，アメリカの一流精神医学雑誌をはじめとする数多くの専門誌に好意的な書評が掲載され，その影響もあって研究資金の提供を申し出る援助者も現れた．おかげで，超心理学研究室（1987 年に人格研究室，2006 年に知覚研究室と改称され，現在に至っている）を立ち上げることができた．さらに，研究助手たちの協力を得て，数多くの国で生まれ変わり事例を掘り起こすことが可能になり，インド，スリランカの他にも，東南アジアの仏教諸国，トルコ，レバノン，ナイジェリア，ブラジル，アラスカなどへも調査旅行に赴き，2300 例ほどの事例を集めることになった．こうして 1997 年には，収集した事例の中でも特に精査された 225 例の詳細な調査報告とこれまでの考察を集大成した大著『生まれ変わりと生物学—母斑と先天性欠損症の原因への寄与』（六分冊で総計 2200 ページに及ぶ，Stevenson, 1997a）を出版するに至った．

さて，スティーヴンソンは，前世の記憶を持っている子どもたちの事例から，頻繁に見られる特徴のパターンをいくつか挙げている（Stevenson, 1988）．まとめると次のようである．

①前世の人物が亡くなる時に，次に生まれ変わる場所や家族などを予言する．
②母親となる女性の妊娠中に，夢の中に前世の人物と

おぼしき者が現われ，彼女の子どもとして生まれ変わることを告げる．家族や友人の夢に現れることもある．

③子どもに先天的な母斑や身体欠損が出現し，それが前世の人物の死亡時の身体的特徴と酷似している．中には，死亡時に手や指を切断された場合，その部分が先天性奇形となって現世の人物に再現された例もある．

④子どもが前世の記憶を語り始めるのは，2 歳から 5 歳くらいであり，話せるようになるのと同時に開始されることもある．そして，6 歳から 8 歳くらいまで続くと，なぜかぱたりと語るのをやめてしまう．

⑤前世を語るときには，感情の高まりとともに自発的に語られる．また，悪夢にうなされた後で語られる場合も多い．

⑥前世の記憶は，特に亡くなる直前の様子やその日の近辺で起こった出来事に集中している．

⑦前世で深く関わったことのある人物や物品を見分けることができる．また，前世の人物の特徴的な行動や嗜好（食べ物の好き嫌いや趣味，遊び方など）を見せる．

⑧前世は事故や事件に巻き込まれて非業の死を遂げた人物であることが多く，殺害された場合には，加害者に対して激しい敵意を見せる．

⑨前世が自殺者であったという事例はいくつか見られるが，人間以外の動物であったという事例は見つかっていない．

⑩前世と現世とで性別が異なっている場合には，性の違和感を訴え，服装や髪型，遊び方，言葉遣いなどに現れる．

これらの中で，とくに客観的な検証が可能な③の特徴については，前世の人物のカルテや検死報告などを丹念に調べて照合を重ねた結果，そのモノグラフと概説書を併記した 112 件に及ぶ「先天性刻印」の事例報告（Stevenson,1997b）を出版している．

では，こうした子どもたちの事例をどのように解釈したらよいのか．これについて，スティーヴンソン博士はいくつかの仮説を想定し検証している．捏造説，自己欺瞞説，偶然説，潜在意識説 , 記憶錯誤説 , 遺伝記憶説，ESP（超感覚的知覚）説，憑依説，などである．これらの仮説はどれも欠点や矛盾が生じることから「事例報告をつぶさに読んだうえで，各自が自分なりの結論を得るべきであって，私の解釈は重要ではない」としながらも，最終的にもっとも妥当な解釈として博士が結論づけたのが生まれ変わり説であった（Stevenson,1988）．

博士によると，心的世界は，生前の身体的特徴の記憶，認知的・行動的記憶を媒介する機構（これを「Psychophore（心搬体）」と呼んでいる）を持っており，それによって運ばれた死者の人格の一部が，直接受精卵や胎児に影響する．そのため，人間の生物学的・心理学的発達は，遺伝要因と環境要因に加えて，「生まれ変わり」という第 3 の要因の影響（他の要因に比べて小さいが）を受けるのではないか，という見解を示している．

2-3　アメリカ人の子どもの前世記憶

ヴァージニア大学医学部においてスティーヴンソン博士のもとで共同研究者として活動していたジム・タッカー博士は，生まれ変わりの信仰や文化をもたないアメリカ人の子どもが前世の記憶を語った事例を調査し発表している．ここで紹介するのは，もともとはアメリカのテレビ番組で取り上げられた事例で，タッカー博士は事後的に調査に関わったのであるが，子どもが語る前世の記憶と前世と思われる人物の史的な事実との一致率の高さから，偶然と考えるには無理があると考察している．

1998 年生まれのジェームズ・レイニンガ―という名のアメリカ人の子どもの事例である（Tucker, 2017）．ジェームズ君は，2 歳の頃に悪夢にうなされるようになり，その様子は誰かに殺されるときのような断末魔の恐ろしい叫び声を上げるなど異様な興奮を示した．そして，夢から覚めると，戦闘機が炎上し脱出できなかった．日本軍に撃ち落されたと語る．その後も日常生活の中で，戦闘機の模型を見て，通常は知るはずもない「ドロップタンク」（長期飛行のための機体の外部につけられた燃料）を言い当て，第二次大戦時に活躍した空母ナトマ・ベイのことを語り，友人のパイロットの名前や戦闘機が空母から飛び立つ話もした．ジ

ェームズ君の父親は，前世など全く信じていなかったが，あまりに具体的な描写や人物名，軍事用語などが語られるので，独自に調査することにした．その結果，1945 年 3 月に日本軍とアメリカ軍が繰り広げた硫黄島決戦の際に，父島上空で日本軍に撃ち落されて死亡したアメリカ軍人ジェームズ・ヒューストン Jr. という人物が浮き彫りになる．4 歳になったジェームズ君は，この前世の人物にあたる同じ名前のジェームズ・ヒューストン Jr. の遺族にも会いに行くが，初対面で姉を言い当てるなど周囲を驚かせた．その後，6 歳のときに両親とともに父島を訪れ，亡くなったジェームズ・ヒューストン Jr. に海上で別れを告げると，次第に前世の記憶を語ることはなくなっていったという．

タッカー博士の紹介するアメリカ人の子どもの前世記憶の事例は他にもいくつかあるが，とくに前世の人物が非業の死を遂げている場合には，記憶を語る子どもがトラウマを抱えているような状態であり，現世の家族とともに，前世の人物の足跡をたどることによって次第に癒されていく，という経過をたどるという展開がしばしば見られる．これは後述する退行催眠とは方法が異なるとはいえ，結果的にトラウマ治療につながっているという点では同じであり，興味深い．

2-4　真性異言を語り出した日本人主婦の事例

中部大学教授の大門正幸氏は，日本においてヴァージニア大学の生まれ変わり現象の科学的研究を継承している数少ない研究者である．もともとの専門は言語学であり，その影響もあって，前世記憶を持つ日本人が「真性異言（xenoglossy）」を語り出したという事例を扱っている（大門，2011）．真性異言とは，学んだことのない外国語もしくは意味不明の複雑な言語を突然に語り出す現象のことをいう．

それは，催眠療法家の稲垣勝己氏が治療に取り組んでいた患者で，退行催眠中にネパール語を話し出した日本人の主婦の事例である（稲垣，2010）．2005 年に行われた催眠のセッションでは，この女性の過去生と思われる二つの記憶が語り出された．一つは江戸時代に渋川村（現在の群馬県渋川市）で浅間山噴火の際の大洪水の人柱で死んだ少女タエの記憶，もう一つはネパール人の村長ラタラジューの記憶である（これらの記録はテレビ番組『奇跡体験！アンビリバボー』で取り上げられている）．後半の場合は，自分のもつ記憶を語るというよりもトランス状態で別の人格が出現したという状況であるが，このときに突然ネパール語を話し始めたのである．この被験者がネパール語を習った経験がないことは彼女の家族や周囲の人々の証言とポリグラフテストによって証明されている．大門氏は留学生のネパール人女性とともにこの催眠セッションに立ち会い，ネパール語で会話が成立するのを確認し，映像にも記録している．

この会話はかなりの確率で成立している．大門氏の分析によると，①質問に対する答えが適切で，会話のやり取りが成立している 36.8%，②質問に対する答えが適切ではないが，会話のやり取り自体は成立している 37.1%，③ちぐはぐなやり取り 8.6%，④判断が難しいやり取り 15.7% といった結果となった（大門，2011）．これは退行催眠中の「真性異言」が調査された日本人で初めてのケースということになる .

ちなみに真性異言に関する調査は，スティーヴンソン博士も行っており，退行催眠時に表出された 2 例と霊媒の憑依現象で表出された 1 例の 3 例を報告している（Stevenson,1984）．また，ジョエル・L・ホイットン博士は，約 30 人の被験者を集めて退行催眠を行ったところ，30 代の男性が中世のバイキングであったという過去生を語り出し，その言語が古代スカンジナビア語であることが確認された. さらにこの男性は，紀元前のメソポタミア・ササン朝時代に使われていたパーラヴィー語の文字を書くことができ，言語学者によって確かめられている（Whitton & Fisher,1986）.

2-5　子どもは親を選んで生まれてくる

産婦人科医の池川明氏は，長野県諏訪市（2002 年 8 月～ 9 月）と塩尻市（2003 年 12 月）に，両市内の全保育園 36 施設と幼稚園 2 施設に調査協力を依頼し，保護者を対象に「子どもが胎内にいたときの記憶や誕生するときの記憶を覚えているのか」についての大規模なアンケート調査を行った（池川，2007）．回収率は 45%で，有効回答数が 1620 件となった . これらのうち，自分の子どもが胎内記憶について語ったことがあると回答した保護者は 32.9%，誕生記憶について

語ったと回答した保護者は20.7%に上った．

この結果を受け，さらに協力者を募って，親子並行での聞き取り調査を行った．そして,この調査の中で,生まれる前の前世の記憶について語る子どもがいること，さらには母親の胎内に入る前の記憶（「中間生記憶」の一種）を語る子どもが多くいることがわかってきたのである．この語りの特徴として，生まれてくるときに，両親（とくに母親）を自分の意志で選んできた，母親を助けたいと思ったから生まれてきた，といった内容がある．また，生まれる前はお空や雲の上にいて背中に天使のような羽が生えていた，母親の様子をそこから観察していた，両親の選択や人生の目的を決定する際には,助言をしてくれる「おじいさん」「大きな人」「神さま」のような存在がいた，などと語る子どももいたという．この調査が契機となり，池川氏と子どもたちのインタビューの様子を記録したドキュメンタリー映画『かみさまのやくそく』（荻久保則男監督・2013年）が制作され，現在でも全国で自主上映会が開催されており，子育て世代の間で静かなブームになっている．

2-6　退行催眠によって現れた過去生の記憶

退行催眠を用いた生まれ変わりに関する研究については，日本では元福島大学助教授で経営学を専門とする飯田史彦氏による著作『生きがいの創造―生まれ変わりの科学が人生を変える』（PHP研究所・1996年）がベストセラーとなることで，広く知れ渡ることになった．この本には元になる論文があり，「「生きがい」の夜明け―生まれ変わりに関する科学的研究の発展が人生観に与える影響について―」（『福島大学商学論集』第64巻第1号・1995年，pp.55-102）である．これらの著書や論文は，題名が示している通り，生まれ変わりに関する科学的研究が，人生における生きがいや生きる力の源泉となり，生きる意味や目的などの実存的な問題と直結するという趣旨のもとで書かれている．ここでは，飯田氏の論文を参照しながら退行催眠による生まれ変わり研究を紹介するが，表向きは科学という体裁を取ってはいるとしても，その内容に深く入り込んでいくと，スティーヴンソンらの研究グループが行った前世記憶をもつ子どもの調査研究とは様相が随分と異なっている印象をもつ．このことに留意しながら，この研究の展開を見ていくことにしよう．

まず退行催眠という方法についてであるが，これは19世紀の後半，精神分析の創始者であるS. フロイトが，当時の流行病であったヒステリー患者の治療のために催眠術を用いていたフランスの医学者J.M. シャルコーのもとに留学し，その後，自身もヒステリー患者に催眠治療を試みていたという史実があるように，無意識を前提とする力動心理学にとって，退行催眠は重要な心理治療の方法の一つである(エレンベルガー，1980)．

ここに登場する，退行催眠を用いて生まれ変わり研究の成果を発表した精神科医のブライアン・L・ワイス博士（Weiss,1988）や，ジョエル・L・ホイットン博士（Whitton & Fisher,1986）は，そうした力動心理学に基づく催眠治療の流れを汲んでいる．彼らは，水や暗闇などを恐怖するトラウマ症状を抱える患者への治療に当たっていた精神科医であるが，その治療過程の中で，予期せずに「過去生（past life)」の記憶を思い出させることになった．過去生という表現は，一つ前の人生（前世）よりもさらに何世代も前の過去の人生の記憶という意味で用いており，被験者である患者はこれまで何度も生まれ変わっているという前提に立った言葉である．

ワイス博士は，伝統的な科学観に立って多数の論文を発表していた研究者でもあり，生まれ変わりや死後の生命など微塵も信じてはいなかった．ところが，1982年に，キャサリンという患者に催眠治療を行っていたときに偶然に起こった出来事によって，自らの信念を改めざるを得なくなったのである．キャサリンは水に対する原因不明の恐怖症を抱えていた．幼少の頃まで記憶をさかのぼらせたが原因が見あたらなかったため，ワイス博士は，時期を限定せずに「症状の原因となった時にまで戻りなさい」という漠然とした指示を行ってみた．すると，キャサリンは，突然アロンダという名の女性の記憶を語り始めたのである．アロンダの住んでいる土地は，不毛な砂漠地帯で，暑くて，川はなく，水は井戸から汲み上げていた．時は紀元前1863年で，アロンダは25歳になっていた．実娘のクレアストラという赤ん坊を抱いていた．この子どもは

現世において親密な関係にある姪のレイチェルであるという．時を進めて，亡くなる場面に行くように指示した．すると，キャサリンはあえぎながら，「大きな洪水が木を押し倒していきます．どこにも逃げ場はありません．冷たい．水がとても冷たい．子どもを助けないと．でも，だめ…子どもをしっかりと抱きしめなければ，おぼれそう．水で息がつまってしまった．息ができない．塩水で飲み込めない．赤ん坊の身体が，私の腕からもぎ取られて行ってしまった！」と息が止まったようになって，彼女の身体はぐったりとした．やがて呼吸が深く安らかになると，「雲が見えます．…私の赤ん坊も一緒にいます．村の人達も．私の兄もいます.」と語り，アロンダの人生が終わったことを告げたのだった．

このようにして，退行催眠によって患者が過去生の記憶を思い出す瞬間に初めて出くわしたワイス博士は，激しく動揺して，理性的には拒否したい思いと，目の当たりにした現実を受け入れざるを得ない思いが交錯した．しかし,その後も催眠療法を続けていくと，キャサリンはさらに驚くべきことを語り出したのである．催眠によってトランス状態に入った彼女は，他人では決して知ることのないはずのワイス博士のプライバシーに関わる事柄，父のヘブライ名，1000 万人に 1 人という心臓欠陥のために死んだ息子のこと，父の死に方，娘の命名のいきさつなどを次々と当てると，これはキャサリンが直接答えているのではなく，中間生にいる「マスター」と呼ばれる指導役の魂たちに教わっているというのである.「中間生（interlife or between-life)」とは，一つ人生が終わり次に転生するまでの間の意識体のみで構成される世界，すなわち死後の世界のことである．やがて，ワイス博士は，キャサリンの口を通じて現れ出てきたマスターたちと直接に会話することとなり，生まれ変わりの仕組みや目的，中間生の階層構造についても詳しく聞くこととなった．

ホイットン博士もまた，退行催眠を用いてトラウマ治療を行っている過程で過去生の記憶を語る患者と出会うこととなり，その後，数多くの被験者から何千年にもわたる過去生の記憶を聞き取ることに成功し，その内容の心理分析を行うことで生まれ変わり研究を促進した研究者である．ホイットン博士は，被験者たちの過去生の個人記録をまとめていく中で，そこに共通するある重要な法則に気づいていく．それは，被験者がいくつもの生まれ変わりを通して経験した苦難や成功，失敗などの出来事が，現世での人間形成に大きな影響を及ぼしているということである．一つの人生においては全く脈絡がないように見える事柄が，複数の人生を通して見ていくと，実は深くつながっていることがわかってくる．さらに言うと，この人生での行動や態度が，次の人生もしくはもっと先の人生における環境や課題目標を決定することになるというのである．

さらにホイットン博士は，その後の研究の中で，多くの被験者たちが，肉体を持たず意識体として覚醒している中間生（あの世）の記憶を持っていることに注目した．催眠状態に入った被験者を，まず過去生の一つへと連れ戻して，その人生の最後の場面を思い出させた後に，「今どこにいますか」「何が見えますか」と質問していく．すると，死の瞬間を回想し，眉をしかめ顔をゆがめるなど苦悶の表情を浮かべていた被験者たちは，死後の中間生の記憶へと移るにつれて，表情を一変させる．まず無表情になり，次に安らいだ穏やかな顔に変わり，やがて驚きが満面に広がる．中間生では，時間の感覚や三次元的感覚がすっかり欠落するため，被験者たちは，目の前の光景をどのように説明すればよいのかわからなくなるという.ある被験者は，「中間生では目に見える身体というものはありません．私はイメージに取り巻かれた観察者なのです.」と表現している．

さて，ワイス博士やホイットン博士が明らかにした，退行催眠を通して多くの被験者が語った生まれ変わりの体験記憶から構成される世界観について，飯田氏の論文（1995）を参考にまとめてみると，次のようである．

①肉体をもたず意識体だけで構成され，意識が覚醒している世界＝「中間生」（あの世）が存在する．
②魂を成長させることが人生(「この世」で生きること）の目的であり，そのために「この世」に何度も生まれてくる．
③魂が成長するためにはさまざまな感情(苦悩や挫折,

成功の喜びや愛情など）を学ばなくてはいけない．

④中間生には，魂の成長を促すために，助言などをする指導役の魂(ガイドもしくはマスターと呼ばれる)が存在する．

⑤指導役の魂に促されながら，人は学ぶべき課題を自分で選んでこの世に生まれてくる．

⑥その課題が苦難な出来事やハンデである．（能力，性格，生活環境，身体障害，離婚，子どもの死，仕事の失敗，失恋など）

⑦一つの生が終わる（死ぬ）ときには愛と光に満ちた世界が現れ，すでに死別した人や神のような慈悲深い存在と出会う．

⑧人生を振り返って反省した後，再び新たな課題を持ってこの世に生まれてくる．

⑨生まれ変わりをくり返しながら，魂はしだいに成長していく．

⑩魂は，成長してこの世で学びを終えたならば，生まれ変わることはなくなり，次元の高い霊的世界に入っていく．

3. 生まれ変わり研究の成果をどのように理解するか

3-1. 前世の記憶に客観性はあるのか

では，ここからは，今まで見てきた生まれ変わり現象に関する科学的なアプローチとその研究の成果に対して，これをどのように理解したらよいのか考えていくことにしたい．ここでは，学生のレポートに書かれていた感想や意見などを参照しながらこの生まれ変わり現象を考えるためのポイントを絞っていき，それを踏まえて考察を進めていくことにする．

筆者はここ数年，非常勤先の大学での講義などでこのテーマを取り上げ，学生たちに生まれ変わりの思想史と現代の科学的アプローチによる研究の概要を一通り説明したあと，学生同士や筆者も含めてディスカッションし，その後にレポートを提出してもらう，といったやりとりを何度か行ってきた．ここではこうして集まったレポートの中から興味深い一文をいくつか紹介していきたい．（なお，学生たちにレポートを書いてもらう際に，その内容が筆者の論文の中で紹介される可能性は伝えており，了承を得ている．また，個人を特定されないように配慮した．）

まずは次のような素朴な感想である．

率直に言って「実感がわかない」というのが正直な感想．今回の講義でこういう研究もあるのかと関心をもったが，自分には前世の記憶があるわけでもないので，生まれ変わりが事実としてあるとしても，今の自分に影響しているとは思わない．

こうした感想はわりと多いものである．この学生が述べているように，前世の記憶をもっていない者のほうが圧倒的に多く，そもそも生まれ変わりについて普段考えているわけでもないので，この研究の内容自体が自分とは結びつかない，ほとんど関係がない事柄のように思えてしまうというのも当然である．大抵の人は，実感の湧かない，経験を超えたような事柄については，なかなか想像力が及ばないものである．

とはいえ，生まれ変わりに関する科学的なアプローチという名目や，社会的権威をもっている医学研究者が報告しているということが前提になっていると，これを完全否定するのは心理的に容易なことではない．学生の中で，講義の内容を聞いて，それでも生まれ変わりは実際には「ありえない」と考える者はごく少数であった．とりわけ前半で紹介したイアン・スティーヴンソンの研究は，研究方法が厳密であり，科学的な検証を十分すぎるほどに行った事例を提示していることからも，事実としては生まれ変わり現象を認めざるを得ないという気持ちにさせる．それほど説得力をもつ内容である．ところが，これに対し，後半に扱った退行催眠によって何世代にもおよぶ過去生の記憶が語られること，さらには中間生の存在やマスターと呼ばれる指導役の魂の存在についての話に及ぶと，違和感を覚え受け入れ難いと感じる学生が多くなる．次の一文はその典型で，退行催眠という方法に対する批判的な見解を示している．

今回，退行催眠という方法を初めて知りましたが，どこまで信用できるのかについては疑問に思いました．患者はトランス状態になっているので語っている内容は無意識から出ているとの説明がありましたが，そうだとすると，それって想像とかイメ

ージの話なのであって，事実ではないと思います．また，退行催眠をかけられているのは，精神科の患者なので，精神疾患を抱えていることから妄想を語っている可能性もあると思います．

この学生が疑問に感じているように，退行催眠を用いた前世療法については，様々な批判がある．石川（2011）によれば，退行催眠によって何らかのイメージ体験をすることは数多くの事例報告や自身の経験からも疑いようはないが，そこで被験者が語る「前世」もしくは「過去生」と感じている記憶が，客観的に歴史上にあった出来事と一致しているのかというと，その確証はなかなか得られないと指摘している．とりわけ偽記憶（false memory）の植え込みの実験や，また催眠時における誘導暗示が含まれている可能性を考慮することで，退行催眠によって導かれた記憶がいかに確証のないものであるかを論じている．

この指摘の通り，ワイス博士もホイットン博士も，退行催眠によって語られた内容が客観的な歴史上の事実と一致しているかどうかを確かめようとはしていない．ワイス博士の事例で言えば，思い出された記憶の年代として「紀元前 1863 年」という具体的な数字を伝えているにもかかわらず，住んでいた場所については具体的な地名を語っておらず，その地域の描写のみである．しかし，その細部まで克明に描写する仕方や強烈な体験を生々しく鮮明に語るところから，確かな記憶をもとに語っているのだろうと推察しているにすぎないのである．その点では，これらの事例報告が科学的であると言い切れないと批判されても仕方がないようにも思われる．スティーヴンソン博士もまた，退行催眠がもたらす過去生の記憶については圧倒的多数が想像の産物であると考え，この方法を採用することがなかった．退行催眠や霊媒を用いた実験の中で真性異言を語った 3 例のみは客観性を確認したが，なおもこうした方法の危険性が依然つきまとうと考えていたようである．そうした中にあって，大門氏と催眠療法家の稲垣氏が，渋川村のタエの記憶の証言と史実とを照合しようとした研究成果は，貴重なものであると言えるだろう．

3-2. 中間生記憶に見られる死後世界と魂の成長神話

学生たちの中で意見が大きく分かれるのが，中間生記憶を通して現れる世界観である．これに関しては，経験科学的な手法が通じないため，客観的に実証することは不可能である．池川氏が子どもたちにインタビュー調査を行い，そこで何人かの子どもが共通して語っていた「生まれる前に親を選んでお腹の中に入ってきた」という話について言えば，これは誘導暗示ではなく自発的に語られた言葉であるとしても，一つのものの見方であることには変わりはない．先入観のない子どもが語るからこそ信頼性があるとするのは調査する側の価値基準にほかならない．よく見られる批判であるが，親を選んでくるとすれば，なぜ自分を虐待する親のもとにわざわざやってくるのか，むしろ児童虐待を肯定することにならないか，という話になってくる．

一方で，退行催眠によって多くの被験者が語りだした中間生の存在と生まれ変わりの仕組みは，もちろんこれも客観的に実証することはできないのであるが，世界観の構成としては驚くほど整合性がある．先ほどの虐待する親のもとに生まれてくる理由にしても，この世界観に照らすならば，魂の成長のためにあえて虐待する親を選んだということになるだろう．竹倉（2015）の考察を参考にすれば，この世界観は，リインカネーション型として分類される近代版の生まれ変わり思想に酷似している．リインカネーション型とは，19 世紀後半の欧米社会において流行した交霊会の催しの中で，霊媒によって語り出された死後の世界や人生の仕組みについての世界観であり，「スピリチュアリズム（心霊主義）」として知られているものである．スピリチュアリズムの思想を形成しているのは，霊媒の口を通して現れる「高次の霊」が語った教えである．高次の霊は，霊界の構造について詳しく語るとともに，魂はひとつの肉体を去った後に，新しい別の肉体に宿ることを語り，魂の進化や成長のためにあえて試練や災難を選んでこの世に生まれてくると語る．なぜこれほどまで一致しているのか不思議に思うくらいであるが，霊媒も退行催眠の被験者と同じくトランス状態に入ることで高次の霊を呼び出すことから，基本的には同一のアプローチによって起こる現象であると考えられる．その点からすると，これをユングが提唱した集

合的無意識の問題と捉えて，その共通のパターンを元型（Archetype）に由来するイメージ体験であると解釈することもできるかもしれない．

とはいえ，両者の世界観が似ていることを根拠に，死後の世界の実在や生まれ変わりの仕組みが受け入れられるのかというと，それほど単純な話でもないだろう．学生たちの反応を見ていくと，この世界観に賛同する者と拒否する者とでは極端なくい違いが見られる．次の二つの意見は，まさに対照的である．

私は以前から，生きる意味や生きがいといったことに関心がありました．生まれ変わりの話にも興味があり，ネットなどで見たりしたので目新しさはありません．ただ，今回の授業で，自分の人生をあらかじめ計画してきた，魂の成長のために人は生まれ変わると聞いて，とても納得がいきました．私には知的障害の兄がいますが，なんで私は普通に生まれてきて，兄は障害者なのだろう，と子どもの頃から疑問に思ってきましたが，魂のレベルが違う，人生の計画が違うのだと考えることで障害であることの意味がわかったような気がします．魂が完全に成長しきって学びが終わったら，今度は人々の成長を助ける指導役の魂になれるのだとすれば，それは楽しみだなと思いました，

自分の人生を自分で決めてくるのだとすれば，運命決定論になってしまうと思う．あらかじめ決まったレールの上を歩くだけの人生であるならば，つまらないし，それこそ何のためにと思ってしまう．人生何が起こるかわからない，人との出会いも偶然であるからこそ面白いのだし，楽しめるのだと思う．それから，魂の成長のために生まれ変わるというが，そもそも成長とはどういうことなのか疑問に思った．身体の成長ならばわかりやすいが，心の成長には指標がないのではないかと思う．もっと言うと，なんで魂は成長しないといけないのかよくわからなかった．

人は魂の成長のために何度も生まれ変わるという世界観に基づいて著した飯田史彦氏の『生きがいの創造』シリーズが静かなブームになっただけあって，その影響力はやはり大きい．生きる意味や生きがいを求めるのは，実存的欲求として人間存在の根底を支えているものであるが，魂の成長神話はこの問題に一つの有力な回答を与えているということになるだろう．

一方で，後者の学生が感じているように，魂の成長神話は，一定の考え方を示しているだけに，かえって様々な疑問を呼び起こす要因ともなっている．それは実存的欲求をさらに刺激するかのように，問いが反芻されてくる．魂が成長するとはどういうことか．何のために魂は成長しなければならないのか．もし中間生の仕組みとして魂が完全に成長し終わった後は指導役の魂になるといった形で構成されているのだとすれば，このような循環のシステムは誰が何のために創造したのだろうか．結局のところ，魂の成長神話は，生きる意味，人間の存在理由（レゾン・デートル）の問題を先延ばしにしただけであって，相変わらず実存的欲求は残ったままなのである．

3-3. 死生観としての生まれ変わりの観念

大学の授業で取り上げるときは，主には死生学との関連であるため，学生たちの感想や意見の中には死生観や宗教に関する考察に絡めていることも多い．そこで，生まれ変わりを死生観として捉えた場合には，どのように見えるのかについて考えてみたい．次の学生の感想では，生まれ変わり現象を事実として容認しつつも，これを死生観として受け入れるべきかどうかの葛藤が率直に吐露されている．

生まれ変わりはありうるとは思うけれど，そうだとすると，今一緒に過ごしている家族は仮のものであり，次の人生では別々の関係になってしまうか，会えなくなったりするのかと想像したら，怖くなった．死んだらまた次の人生で会えるといいね，というのもわかるが，果たして本当にそれでいいのか複雑な気持ちになる．・・・人生はたった一回かぎり，二度とめぐってくることはないと考えたほうが，いのちは尊いと思えるのではないだろうか．生まれ変わりだと，ゲームをリセットするみたいで，いのちを軽く考えてしまいそうな気がする．

いのちの重み，尊厳性という観点からすると，人生は死によって終わりがあるからこそ,輝けるのであり，深く味わえるのではないか．やり直しがきく，次もあるのだと考えてしまうと，今ここで私が生きているという価値は色褪せてしまうのではないか．また，家族を含めた現在の人とのつながりを大事にしたい，大切であると考える者からすれば，前世や来世での人生や人間関係というのは，今の人生とは隔絶しでおり，まったく別物である．この感覚はとても納得のいくものであり，人生観，死生観としては尊重されるべきものであろう．人生における苦難や悲哀なども，今ここにおいて一回かぎりの奇跡として起きていると考えると，新たな形で受け止め直すことができるのではないかとも思うのである．

もう一つ，今度は多くの日本人が抱いている死生観，先祖とのつながりといった死生観に照らしてみた場合の見方である．

私は生まれ変わりには反対である．科学的な事実としてあるかないかというより，感覚的にあってほしくないと思っています．最近，祖母が亡くなったこともあって，お葬式に出てからいろいろと考えていますが，やっぱり人は亡くなったら，遺された家族を近くで見守ってくれる存在になるのだと思います．亡くなって生まれ変わってしまうのだとすれば，祖母はまったく違うところにいて，私たちとは関係のない人になってしまう．それは不自然だと思います．自分の人生を計画してきたのであれば，死んだ後でも計画できるはずなので，私だったら，生まれ変わらずに自分の家族を見守りたいと考えると思います．

民俗学の祖である柳田國男は，日本の精神文化の基層には祖霊信仰が根付いていることを明らかにした（柳田，1965）．これは，人は亡くなると遠くには行かず，この世とあの世を行き来しながら，年月をかけて祖霊となり，子孫を見守り続けていく，という信仰である．生まれ変わりの観念は，こうした古くからの日本人のもつ民俗的な死生観とのあいだに齟齬や矛盾を生み出す．ただ，決して生まれ変わりのような観念がないわけでもない．といっても，これは孫が生まれると祖父の生まれ変わりだと考えるようなもので，あくまで祖霊信仰を基盤にしたものである．他にも，日本人の臨死体験の特徴の一つに，三途の川の向こうですでに亡くなった親族が現れて，まだここに来るのは早いなどと告げられるというものがある（松谷，1986）．あるいは，死期が近くなると，亡くなった伴侶などが現れて実際に会話している様子が見られる，お迎え現象についての報告もある（奥野，2015）．多くの日本人は，身近な死者との結びつきが強いため，現在の境遇とはまったく異なる時代や地域に生まれ変わるという，地縁や血縁を無視した発想には違和感を抱きやすいのかもしない．

とはいえ，現代は，都市部だけでなく地方でも地域共同体がくずれており，またグローバリズムや高度情報化が進んでいる中では地域性に根付いた固有の文化も成り立たなくなっている．個人がますます先鋭化し，仮想現実の領域がますます広がっていく社会の中では，リインカネーション型の生まれ変わりの考え方のほうが受け入れやすくなっていくようにも思う．

死生観に関連するところでは，いわゆる伝統宗教が語ってきた死後世界の観念と，調査研究が報告する生まれ変わり現象との整合性がないことを問題にする意見もある．

キリスト教には生まれ変わりの観念はなく，亡くなれば天国に行くので，キリスト教徒からすれば受け入れられない考え方だと思われる．また，仏教には輪廻転生の思想があるが，魂の成長という考え方は仏教的ではないように思われる．古くからの世界宗教が語ってきた考え方とは異なり，近代になって起こったスピリチュアリズムの考え方に近いことから，結局は多様な価値観の一つにすぎないのではないかと思う．つまり,この生まれ変わりの観念を，絶対視する必要はないということだ．

この学生が指摘するように，伝統的な世界宗教と比較することは大事な視点であり，またスピリチュアリズムとの類似を考えると，生まれ変わり研究の成果もまた，一つの価値観，一つの現実として捉えていく

ことが重要なのだろうと思う．19 世紀後半に登場したスピリチュアリズムは，同じく 19 世紀後半に欧米社会に広がった神智学運動に後押しされ，さらには 1960 年代半ばに起こったアメリカのニューエイジ思想と結びつくなどして，近代社会の精神文化の基層の一つであるオカルティズムに組みこまれてきた思想である（大田，2013）．これは日本においては 1980 年代以降の精神世界ブームの中核を担い，その頃に成立した新興宗教の教義にも多大な影響を与えてきたし，また 2000 年代のスピリチュアル・ブームの起爆剤にもなった．宗教社会学の観点から見れば，『生きがいの創造』のブームもまた，スピリチュアル文化の一端に位置づけられる（堀江，2018）．このように見ると，生まれ変わり現象は，今後ももちろん科学研究の対象と考えるべきであるが，同時に，現代的なサブカルチャーの動きとして考慮することも必要であるように思われる．

なお，伝統的な仏教思想との比較で言えば，決定的な違いとしては，無我を説く仏教からすると，実体的な魂の存在は認められないことが挙げられる. さらには，輪廻転生を苦しみや迷いの世界と捉えており，ここから抜け出ること，すなわち解脱こそが真の目的である．生まれ変わりを繰り返しながら成長，進化，向上していくという肯定的な発想はなく，輪廻転生はどこまでも苦しみの無限ループである．そして，そのことに気づいて，苦しみの原因を自己洞察し，悟りの智慧へと転換することで，輪廻の流転を超えていくのである．

ただし，部派仏教（中でも説一切有部）や，大乗仏教にいたると，様々な仏や菩薩，神々（諸天）など，人間を超越する存在が数多く登場して，輪廻から救済していく物語が展開し，イメージ世界が強調されるようになっていく．中国において道教と習合した十王信仰では閻魔大王や地蔵菩薩も登場する．キリスト教のカトリックの教義には，神の御使いである天使が多く登場し，人間を守護する霊として現れる．これもまた神話的なイメージ世界を強調する傾向であるが，退行催眠を通して出現する指導役の魂というのは，こうした世界宗教が語ってきたイメージ世界にも通じるところがあると解釈し，半ば強引に結びつけることも可能ではある．

4. おわりに

日本では，2007 年に高齢者人口の割合が 21％を超え，超高齢化社会を迎えて久しい．近年では，年間の死亡者の数が 140 万人に迫る勢いで増加しており，これまでの歴史では経験したことのなかった多死社会にすでに突入している．しかし，同時にまた未曾有の長寿社会でもあり，その陰で死は隠蔽され，実際には多くの人が死を身近に感じられていないのが現状である．戦後の経済成長期を通じて，長らく死生観の空洞化と呼ばれる状況が続いてきたが，この 10 年ほどの間に死生観に目を向ける傾向は確実に高まってはいる．死を身近に感じられてはいないが，死を意識し，いのちの大切さについて考える機会は増えているのである．こうした時代状況の中で，生まれ変わりの観念は私たちの人生や社会にどれほどの影響を及ぼすのだろうか（藤，2020）．

2008 年に行われた「国際社会調査プログラム」の調査結果によると，「輪廻転生を信じる」と回答した日本人は，42.1％という結果となり，世界の諸国の中でも上位にランクインしていたという（竹倉，2015）．すでに古いデータとなったが，現在ではさらに増えている可能性もある．とはいえ，学生たちと話し合い，レポートでの感想を見るかぎりでは，生まれ変わりを死生観としてもっている人はほとんどいない，という印象である．知識や情報として生まれ変わりがあるということは容認できるし興味はあるが，自身の生き方として考えるならば実感が伴わず受け入れているわけではないというのが，学生たちの素直な感覚であるように思う．もちろん，今後の人生ではどうなるかはわからない．自身の死が差し迫った状態になったとき，大切な人と死に別れたとき，あるいは挫折や苦難と向き合わざるを得なくなったときなどに，生まれ変わりの観念が救いになるかもしれない．その可能性は捨てきれないだろう．

一方で，筆者が生まれ変わりに関心を寄せている理由として，近代の科学主義的な唯物論的思考への批判がある（坂井，2020）．脳神経科学の見方が主流を占めているように，意識や心は脳の機能によって産み出されたものという考え方は，科学研究者のあいだでは信仰のように根強くある．しかし，本当にそうなのだ

ろうか．前世の記憶をもつ子どもたちの事例は，果たして唯物論的な脳神経科学で説明がつくだろうか．スティーヴンソン博士は「Psychophore（心搬体）」という記憶を媒介する何らかの機構を仮定したが，この発想はなおも物質主義を脱していないように思われる．ところが，ヴァージニア大学の研究を引き継いだタッカー博士は, 量子物理学の観察者問題をヒントに, 生まれ変わりの現象を私たちの心が共有する一つの夢であるとする興味深い見解を述べている（Tucker, 2017）．それは世界の中に私たちの心が存在しているのではなく，私たちの心の中に世界が存在している，私たちのイマジネーションが世界を作り出しているという，コペルニクス的転回である．ここには神秘主義的な傾向がはらんでいて俄かには理解しがたいように見えるが，仏教の唯識思想では，この世界は一つの心によって作られたものであり，夢幻にすぎないとする考え方を前提にしており，タッカー博士の発想が決して荒唐無稽ではないことを証している．このように見ていくと，生まれ変わりの観念というのは，現代人を近代の科学主義のまどろみから目覚めさせるための壮大な問題提起なのだとも言えるのではないかと思うのである．

参考文献・資料

大門正幸（2011）『スピリチュアリティの研究―異言の分析を通して』風媒社

大門正幸（2015）『人はなぜ生まれ、そして死ぬのか』宝島社

エレンベルガー，アンリ（1980）『無意識の発見 上　―力動精神医学発達史―』（木村敏・中井久夫訳）弘文堂

平田篤胤（2000）『仙境異聞・勝五郎再生記聞』（子安宣邦校註）岩波文庫

星野英紀，池上良正，氣多雅子，島薗進，鶴岡賀雄編『宗教学事典』（2010）　項目「再生・生まれ変わり」p.436-437 丸善株式会社

堀江宗正（2018）「第五章 死後はどう語られているか―スピリチュアリアズム的死生観の台頭」『現代日本の宗教事情〈国内編Ⅰ〉』岩波書店

藤和彦（2020）『人は生まれ変わる―縄文の心でアフターコロナを生きる』ベストブック

フジテレビ『奇跡体験！アンビリバボー』「前世療法スペシャル」（2006年10月12日放映）／「戦慄 前世の記憶を語る主婦」（2010年8月5日放映）

稲垣勝巳（2010）『「生まれ変わり」が科学的に証明された！―ネパール人男性の前世をもつ女性の実証検証』ナチュラルスピリット

飯田史彦（1995）「「生きがい」の夜明け―生まれ変わりに関する科学的研究の発展が人生観に与える影響について―」『福島大学商学論集』第64巻第1号 pp.55-102

飯田史彦（1996）『生きがいの創造―生まれ変わりの科学が人生を変える』PHP研究所

池川明（2007）『子どもは親を選んでくる』日本教文社

石川勇一（2011）「第4章「前世療法」の臨床心理学的検証」『心理療法とスピリチュアリティ』勁草書房

笠原敏雄（1984）『死後の生存の科学』叢文社

松谷みよ子（1986）『現代民話考5 あの世へ行った話・死の話・生まれ変わり』立風書房

McClelland, Norman C. (2010) *Encyclopedia of Reincar-nation and Karma,* McFarland Publishing

荻久保則男監督（2013）『かみさまのやくそく―胎内記憶を語る子どもたち』（ドキュメンタリー映画）

奥野滋子（2015）『「お迎え」されて人は逝く』ポプラ社

大田俊寛（2013）『現代オカルトの根源―霊性進化論の光と闇』ちくま新書

坂井祐円（2018）「死後の世界を前提とする死生観について」『南山宗教研究所報』28号，pp.21-30

坂井祐円（2020）「死後存続研究が示す「死後の世界」と「心的現実」の問題について」『南山宗教研究所報』30号，pp.5-16

Stevenson,Ian(1984)*Unlearned Language: New Studies in Xenoglossy,* University Press of Virginia.（『前世の言葉を話す人々』笠原敏雄訳・1995年・春秋社）

Stevenson,Ian(1988)*Children Who Remember Previous Lives: A Question of Reincarnation,* University Press of Virginia.（『前世を記憶する子どもたち』笠原敏雄訳・1990年・日本教文社）

Stevenson,Ian (1997a) *Reincarnation and Biology: A Contribution to the Etiology of Birthmarks and Birth Defects. Volume 1: Birthmarks. Volume 2: Birth Defects and Other Anomalies.* Praeger Publishers.（『生まれ変わりと生物学―母斑と先天性欠損症の原因への寄与』）

Stevenson,Ian (1997b)*Where Reincarnation and Biology Intersect,* Praeger Publishers.（『生まれ変わりの刻印』笠原敏雄訳・1998年・春秋社）

竹倉史人（2015）『輪廻転生―〈私〉をつなぐ生まれ変わりの物語』講談社現代新書

Tucker,Jim B.(2005) *Life Before Life: A Scientific Investigation of Children's Memories of Previous Lives,* St Martins Press.（『転生した子どもたち　ヴァージニア大学40年の「前

世」研究』笠原敏雄訳・2006年・日本教文社）

Tucker,Jim B.(2017)*Return to Life: extraordinary cases of children who remember past lives,* St Marin's press.（『リターン・トゥ・ライフ』大野龍一訳・2018年・ナチュラルスピリット）

Weiss M.D.,Brian L.(1988)*Many lives, Many Masters,* Touchstone（『前世療法―米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』山川紘矢 山川亜希子訳・1996年・PHP研究所）

Whitton,Joel L.and Fisher,Joe (1986) *Life Between Life : Scientific Explorations into the Void Separating One Incarnation from the Next,* Grand Central Publishing（『輪廻転生 驚くべき現代の神話』片桐すみ子訳・1989年・人文書院）

柳田国男（1965）「先祖の話」『定本 柳田国男集 第10巻』筑摩書房